

## 国重要文化財・吉福家住宅の 草刈り作業を実施！



作業前（左）と作業後（右）、前庭を中心に草刈り機による除草作業を実施した。



先週 16 日(金)10 時から昼休みを挟んで 15 時まで生涯学習課で国重要文化財・吉福家住宅の除草作業を行った。生涯学習課では、4 年前から夏と秋、年 2 回ほど草刈り作業を毎年実施している。池内課長補佐、田村室長、吉本職員の 3 名が作業にあたった。

吉福家住宅の保存・活用は、長年の懸案であり、様々な方々からご意見やアドバイスをいただいているところである。建物の老朽化に伴い明日 21 日(火)には、公益財団法人・文化財建造物技術協会大阪事務所の加藤修治氏ら 2 名の専門家に訪問いただき、建物の修繕と保存・活用についてご意見をいただくことになっている。

# = 万次郎の人生の概観とその謎 =

……万次郎略年表……

1827年(文政10年)1月1日  
土佐国幡多郡中浜村(現在の土佐清水市中浜地区谷前)に誕生

1841年(天保12年)1月5日(14歳)  
宇佐浦所属のカツオ船に雇用され、筆之丞等5人で足摺岬沖に出漁  
1月5日晚(興津崎西掛りに停泊)→1月6日晚(土佐佐賀の白浜停泊)  
→1月7日足摺岬沖合いで遭難  
…室戸沖、紀州沖を漂流し、1月14日鳥島へ  
143日間の無人島生活  
5月19日米国船籍の捕鯨船ジョン・ハウランド号に救助される

〈米国で学び、捕鯨で世界各地を航海〉

1851年(嘉永4年)1月3日(24歳)  
琉球国摩文仁小渡浜海岸に上陸

1852年(嘉永5年)10月5日(25歳)中浜村に帰省して母と対面(滞在わずか3日間)  
10月8日 高知城下の教授館へ出仕  
12月12日 土佐藩に召抱えられる(武士へ取り立て)

1853年(嘉永6年)6月20日(26歳) 老中阿部正弘より江戸に召喚される  
8月30日 伊豆韭山代官・江川太郎左衛門の配下としてその邸内に居住を許される  
11月5日 幕臣となり中濱姓を名乗る

1854年(嘉永7年)2月12日(27歳) 団野鉄と結婚(江川太郎左衛門の世話)

(28歳)江川太郎左衛門逝去  
(30歳)中浜村に帰省、江川家とともに銀座に転居  
『ボーディッチ航海書』翻訳完成 捕鯨術指導のため箱館へ赴任  
(32歳)『英米対話捷徑』を作成 **僅か8年足らずの 最初の結婚**  
(33歳)威臨丸でサンフランシスコへ  
(35歳)小笠原開拓調査、妻・鉄の病死  
(36歳)小笠原での捕鯨、ホーンズン事件  
(37歳)薩摩藩の開成所教授に就任  
(39歳)中浜村に帰省(3ヶ月近く滞在)  
後藤象二郎と長崎へ(池道之助を従えて)  
上海に土佐藩船を購入に行く

1868年(明治元年)10月23日(41歳)土佐藩に戻る  
(42歳)銀座から江戸砂村の下屋敷へ転居  
明治政府から開成学校教授に任命される  
(43歳)ヨーロッパ視察、途中でホイットフィールド船長宅を訪問。(船長65歳)  
(44歳)足に潰瘍ができ、ロンドンから1人帰国 ※これが最期の公務  
帰国後に脳梗塞…言語障害や下肢の麻痺  
自宅や鎌倉の別邸で療養生活…事実上の隠居

1898年(明治31年)…脳梗塞で逝去 71歳の生涯

激動の44年間

静寂の27年間

左の表は、中浜万次郎の人生の概観を年表にまとめたものである。ご覧いただいたらお分かりになると思いますが、万次郎はヨーロッパ視察からの帰国後44歳のとき、脳梗塞に倒れてしまいます。

一時は、言語障害や四肢の麻痺等の後遺症に悩まされますがその後、持ち前の強い生命力により回復します。

しかし、44歳以降の27年間の人生は、それまでが「動」であるならば、「静」というべきであり、ゆっくりとした時間の流れの中で穏やかな生涯を送ったのです。まさに「静寂の27年間」というべき時間でした。

44歳の万次郎にどのような心の変化があったのでしょうか。

これはあくまでも勝手な推測の域を脱し得ませんが、父や妻鉄の死、様々な身近な人の死に接する中で、有限の人生をいかに

に生きるべきかを深く思考していたのではないのでしょうか。

これは私たちの人生も同じです。「仕事また仕事の多忙な毎日」に忙殺され、家庭を、大切な人を省みることさえままならない自らの人生に疑問が生じてしまったのではないのでしょうか。

私たちも、ついつい「仕事第一」で「家庭は第二」になっていないのでしょうか。実は、仕事も家庭も「第二」ではなくて、ともに「第一」なのです。仕事は、もちろんどちらにもベストを尽くすものです。それと同時に家庭や家族は、自分にとってかけがえのない存在なのです。

44歳以降の万次郎には、残りの人生を大好きな家族とゆっくりと穏やかに生きていきたい、そんな願いがあったのかもしれない。

私たちも万次郎の生き方を通し、これを自分の人生と重ねながら、自分の生き方や人生をもう一度見つめ直してみるということも大切ではないのでしょうか。…

今日は万次郎を深読みしてみました。